ヴードゥー死するネコについて

── ストレス学説再考 ──

Voodoo Death of Cats: Revisiting Stress Theory

美馬　達哉

1．ストレスとは
2．イデオロギーとしてのストレス
3．ヴードゥー死の解剖学
4．擬鼠主義化される心
5．「異常」な突然死とヴードゥー死

「ストレス」は現代日本語では広く使われる言葉になっていますが，もともとは生理学者のハンス・セリエによって「身体の摩耗の度合い」を示す科学技術用語として作られた言葉です．今回の報告では，ストレスが心身の相互作用を意味する言葉として大衆文化の中に一般化する過程では，「身体の怪我なしにストレスによってショック死する」というドラマティックなイメージが重要だったことを指摘し，その起源と歴史的背景について考察してみたいと思います．

前半はストレスと関係する話になります．ストレスという言葉と私の基本的な考え方についてまとめます．後半ではヴードゥー死の話が出てきます．ヴードゥー教というのがあって，人型みたいな人形を使って人を呪い殺すとされています．呪いによって人が死ぬのはなぜかということが，20 世紀半ばくらいに医学の分野と人類学の分野とで議論になるのですが，なぜその時期にそんな議論になったのか，人はどうしてそれを解明しようと思ったのでしょうか．ここでは，社会において異常な出来事をどう意味づけするかという問題への対処としてヴードゥー死が使われたという観点からこれをみていきたいと思います．

1．ストレスとは

1-1．現代日本での「ストレス」の認知度

まず，ちょっと古い 2002 年のデータですが，「カタカナ語の認知率，理解率，使用率」というのがあります．それで見ると，「ストレス」という言葉は，認知率が高いです．言葉としての意味の理解率も使用率も高いのでよく知られている言葉です．ここで他に調べられているのは「ボランティア」，とか「リサイクル」とか「IT」とかですが，それらよりも「ストレス」のほうがはるかに高く，カタカナ語ではありますが，日常語に十分なっている言葉として今使われているということです．

Mima Tatsuya　京都大学高次脳機能センター

1-2. 隠喩としてのストレス

「ストレス」という言葉は，もちろん後で説明するように医学とか生物学の分野では非常に厳密な専門用語として使われているのですが，日常生活ではどういう意味で使われているのでしょうか．この見方は「隠喩としてのストレス」と言い換えてもいいでしょう．ここで紹介する八つは，ヘルマンというイギリスの人類学者が調べたものですが，日本での場合と非常に似た使われ方をしています．

一つ目に「目に見えない重荷」．「ストレスによって押しつぶされる」というイメージが一つ目としてあります．

二つ目にテンス．緊張という意味ですね．テンションが高いとかのテンスです．ですからひもや線のようなものとしての神経のようなものとして神経が引っ張られるイメージとして使われています．

三つ目が「内的な混乱状態」，カオス．日本語の語感としてはパニックが一番近いです．重いとか，引っ張られているというイメージとは別に，「ばらばら，混乱，むちゃくちゃになっている」というイメージがあります．

四つ目に「断片化」．これもカオスと似ていますが，ストレスで粉々になる，バラバラになっているというイメージです．

五つ目に「壊れた機械」．ばらばらというよりは，これはバーンアウト，燃え尽きたという意味です．要するに機械油がなくなって，エンジンが煙を出して止まりました，というイメージに近いでしょうか．

六つ目に「生命の水の不足」．生命力がなくなって空っぽ，力がなくなって干からびましたということです．

七つ目に「内的爆発」．ストレスが多くて「もう爆発しそう」というイメージですね．

八つ目に「対人関係の中でうまくいかないこと」もストレスと言います．

ということで，一つ一つは丹念に見ていくとまったく違う意味だということがおわかりいただけましたでしょうか．もう一つ面白い点は，このイギリスの例は，日本の場合も似ているところです．このリストを挙げて「ストレスですか？」と尋ねられると，日本でもうなずく方が多いでしょう．その意味では普遍的な一個のイメージですが，実は一個一個みていくと互いに矛盾しています．例えば，六番目の空っぽになった状態と七番目の爆発するというのは，普通に考えればまったく逆のことです．

1-3. 外因か内因か

生理学・工学という理系の領域のストレスとは，何かが外からやってきて，システムや人間のほうがそれに対して抵抗，反抗，反応することを意味します．しかし用語は少し違っています．生理学ではストレッサーが外からやってきて，人間のほうがストレス反応を起こします．工学だと，ストレスとストレーンという言葉になって，ストレスが外からやってきて，ストレーンという反応が起きます．生理学だと人間の側の反応がストレスです．工学では，たとえば，鉄橋があってそこに重みがかかってくることをストレスと呼びます．鉄橋が揺れて元の形に戻るのがストレーンです．

ということで，生理学と工学では逆になるのでややこしいです．ただし実際には，外から来るものとそれに対する反応とは分けることは出来ません．先ほどの日常語としてのストレスという言葉の意味の中でも，一つ目の重荷とかは外から来るものですし，二番目の神経の緊張というのは中での話ですから，外から来るものを指したり，中から来るもの，中での反応とか気持ちを指したり，バラバラです．バラバラであるというよりその二つは分けられないということの反映なのです．

1-4．ハンス・セリエによる「ストレス」の発見

ストレスという言葉の始まりをまず見ていこうと思います．1936年にハンス・セリエという人が「各種有害作用因によって惹起された症候群」という論文を書いて「全般性適応症候群（General Adaptation Syndrome）」ということを言っています．その中では，「疲れてすり減った状態の度合いのことを指す（wear and tear）」と定義しています．これは何かが中で起きているということですね．これはネズミを使った実験でしたが，セリエは「非特異的」と表現しています．これは有害とも有益とも限らない，という点がポイントです．ストレスというと外から何かがやってきて人間の体の側があるいは動物の体の側が何か反応する，というだけで，良いか悪いかっていう価値判断は，生物学の範囲を超えると考えるわけです．

ちなみに，セリエ自身の考えたのは，病気一般にそういうストレスが関係しているのではということでした．病気にはいろいろあるのだけれども，その本質として「まさに病気である症候群」があって，それをストレスと呼んだのです．それは今で言うと，ステロイドホルモンや副腎皮質ホルモンと呼ばれている物質の働きです．

1-5．時間的経過と三つの相

もう少しセリエの話をしましょう．ストレスは，もともと三つの相に分かれていました．

まず①警告期．最初に外から刺激が来たというときには，全身で対応するので何とか乗り切れる，というか正確には乗り切れるように身体のほうが反応するわけです．

次に②抵抗期．身体の反応がうまくいっている間は刺激が強い状況に人間のほうが慣れて，対抗的にもっとうまくいったりします．すごく頑張った状態といってもいいでしょう．

そして③疲弊期．ところが，ストレッサーがずっと続いていると，生き物のほうが疲れるのでボロボロになります．

この3段階です．途中でストレスが減ったらなんとかなるが，ずっと続いているとダメなんだ，という話になっています．

2．イデオロギーとしてのストレス

2-1．「病人役割」における責任と義務

ここまでがストレスの生物学的な意味で，セリエの提唱した概念です．それが今はかなり広い使われ方をしています．特にどこが違うかというと，セリエの場合，もともとの「ストレス」という言葉の場合では，要するに一つの臓器とか，体のどこかの器官がおかしい，という話であって，そこには精神的なストレスは含まれていません．

身体のストレスであれば，先ほどの有害ストレスと有益ストレスとの両方を含んでいて，刺激があるからシステムがうまくいくという場合もあれば，逆にうまくいかない場合もある，と中立的な言い方になります．ところが，精神なストレスとなると，もうちょっと道徳的な意味づけがくっついてきます．「精神が健康的であることは大変よろしい」という道徳的な意味づけが入ってくるのです．

精神的なストレスの心理的側面が強調されるというのは，社会学で言う「病人役割」と絡んできます．社会学では「病人」とは「病人という役割を社会の中でやっている人である」となります．社会学の場合は，実際に病気があるかどうかはある意味では関係ないのです．病気があっても隠している人は病人として扱われないですし，逆に仮病みたいに病気であるということにすれば病人として扱われるのです．これは社会的な意味での病人の定義です．

病人役割には，二つの義務と二つの権利があると言われています．権利の一つとは休んでもいい，休んでいてもズルとは思われなく

て許される権利です．その代わりに義務がそれとペアになっています．治療のために努力をしないといけないという義務です．そういうある意味では道徳的な意味づけがついてきます．

それでもう一つは責任の話です．病人に責任があって病気になったわけではないということです．責任を免除される権利ですね．神の罰で病気になったという考え方を近代医学は否定しました．しかし，責任が無いとされる一方で，医師の命令を聞かなければならないという義務が生まれます．隔離や保護されねばならないというわけです．

2-2．精神的なストレスと問題の個人化・心理化

ですから責任があるか無いかというのが一つの基本になっています．心理的なものがそこに入ってくると，古典的な病人役割が微妙にずれてきます．ストレスが身体的なものじゃなくて精神的なものとなってきたときに，心理的な不健康はその個人の精神的な強さや弱さの問題になりやすいのです．つまり個人の心の中の問題にされやすい．しかも精神的な強さや弱さは誰かに非難されるというのではなくても，その人の心の中で自己責任として完結してしまいます．

これを，一般的には犠牲者非難イデオロギーと呼びます．犠牲者自身，つまり病気になった人が悪いという論理です．例えば，タバコがそうですね．排気ガスのせいとか受動的喫煙とかタバコ依存症の友達がいるとかのせいであれば，肺がんになったからと言って非難されることはありません．でも，喫煙者が肺がんになったなら,「タバコをやめることができないとは意志が弱い，自己管理をきちんとしていない」として非難されます．心理的なメカニズムを考慮すると，犠牲者自身に道徳的責任があるというような主張が出てきやすいのです．ここで注意しておくべきは，「病人役割」によって休むのを免罪できるという社会的仕組みとはずれてきているということです．

もともと中立的な意味で，有害なものと有益なものとの双方があったはずなのに，有害なものだけがストレスとなっていることは，この点に関連しています．現代社会での「ストレス」という言葉の使い方にはネガティヴなイメージがつきまとうのです．

もともとはネズミを責め苛（さいな）んだ実験から，ストレスという概念は生まれました．動物実験ですから，対人関係や精神的なストレスではなく，肉体的な痛みが中心でした．それが現在では，精神的な意味が重視され，ストレスはネガティヴなものになったわけです．

基本的には健康はよいことであって病気はよくないことであって避けます．そこにさらに社会的なものが加わって語られたときにどうなるでしょうか．医学的にストレスだから良くないとか，ストレスになるから良くないとかと言うのはまだいいでしょう．さらに一歩進めて，ストレスへの適応能力が弱いということが問題にされ，個人の資質としての精神的な強さが問われるとおかしなことになります．病気になるのはストレスへの適応能力の差とされて，ストレスに弱いからダメだという言い方にまでなってくることがあります．何かマイナスなことが起きたときに，その人にストレスに対して抵抗できないからダメだという議論に進む場合には，病気や失敗という偶然的な出来事を医学的に正しい必然性として受け取らさせるような力が働いているということです．

2-3．戦争とストレス研究

さて，ここまでのお話は，『〈病〉のスペクトル』（人文書院，2007 年）に書いた内容のあらすじです．今回のお話はここからのスピンアウトです．ストレスの動物実験とはどうい

うことをやっていたのか，もういっぺん見てみましょう．1940 年代の動物実験でのストレス（ストレッサー）は，ラットを何かに閉じ込めて全然運動できないような状態を指していました．そうして閉じ込められたラットの身体に傷をつけると治りが遅くなるという実験です．それをストレスと言っていたのです．これを見るだけでも，今のストレスの概念とは違うということが分かります．

なぜ，閉じ込めたラットと病気との関係を研究したのでしょうか．実はそれは戦争と関係があるのです．潜水艦が発明されて非常に狭いところに人間を閉じ込めて健康にやっていけるかどうかという問題が，軍人の精神衛生として議論されていました．みんな武器を持っていますから，潜水艦の中で大喧嘩したら大変なことになります．そういう背景から閉じ込めた場合のストレスという問題が出てくるのです．あとは捕虜のストレスですね．これも戦争との関係という点では同じです．今でいう PTSD，外傷後ストレス症候群です．

第一次世界大戦，第二次世界大戦は，潜水艦があり，収容所もあるような，それまでの戦争とはかなり性質の違った大規模なものでした．第一次世界大戦の時だと，もともと職業軍人が主体だった軍隊は初期の段階でもう全部なぎ倒されるようにして死んでいきます．あとに残るのは徴兵制で採ってきた素人の兵士です．素人で戦争経験が全くない人を集団生活させて，時には潜水艦に乗りこませます．もし捕まったら捕虜になって収容所に入れられたりします．この特殊な状況を背景として，ストレスの研究は始まるのです．だからこそ，一番最初のストレスの実験は，行動の拘束を一番ストレスの多い状況として扱ったのです．

3．ヴードゥー死の解剖学

3-1．医療人類学によるヴードゥー死の研究

以上を踏まえたうえで，ストレスからはちょっと離れてヴードゥー死の話に迂回します．これは，医療人類学という分野です．医療人類学というのは，未開社会･伝統社会で，近代医学が入っていないようなところでは，人々がどういう医療をしているかとか，どういう宗教と医療が結びついているか，ということを研究する学問です．その研究テーマの一つの有名な例としてヴードゥー死があります．南アメリカやアフリカ，オーストラリアやニュージーランドとかハイチとかで報告されているのですが，呪われたり妖術をかけられたりした人が本当に死ぬことがあるという現象です．ヴードゥー教では，人型みたいなものに，おまじないをして呪う．日本では恨みのある相手を見立ててわら人形の胸にくぎを打ちますね．あれと同じようなものです．

ヴードゥー教の妖術をかけられたら死ぬなどということは，科学的にはありえないと当時思われていました．それを生理学者として非常に有名なキャノンが研究して，1942 年にアメリカの人類学雑誌にヴードゥー死についての研究論文を出しました．ヴードゥー死というのを，現在でいうストレス死として説明したのです．

3-2．ヴードゥー死のメカニズム

人類学では，有名な文化人類学者で最近死んだクロード・レヴィ＝ストロースが『構造人類学』の「呪術師とその呪術」の中で「生きている権利と義務の主体であった彼は，すでに死者であること，恐怖と儀礼と禁忌の対象であることを宣告され，その力に屈するのである」と書いています．まぁ「お前はもう死んでいる」として，変なまじないをかけられてしまうと，周囲の人々もみんなビビってしまいます．それを見て当人がその力でストレスを感じて死んでしまうのである，という

説明です．これはキャノンが考えていたこととほぼ同じです．

社会の中での単なる言葉によるやり取りが実際に人間を殺したりする力がある，というのは，人間における「文化」や「言葉」の重要性を示す好例です．

ある宗教なりなんなりの信念を共有する共同体の中で，周りの人みんなが呪いを信じていると，「呪いがかかったんだー」と本人も信じてしまい，同時に周りの人も犠牲者を社会的に孤立化させてしまうことで犠牲者は弱って死ぬというのです．その葬儀の時にはみんなで集まって，「あの人，呪いにかかって死んでかわいそうだねぇ」とか話し合って，自分たちの信念が確認されます．その共同体の中の社会的コミュニケーションの中で，死というのが作られるわけです．

呪いをかけられてビックリしたとか，非常に悲しいとか，嫌だとか，そういう強力な情動がストレスとなって，本人を苦しめ続けて，体の力が全面的にそれに動員されて，かく乱された状態が制御されないままで続くならば，死という恐るべき結果が待ち受けていても不思議ではない，というのです．これはさきほどのストレスの3段階ですね．まず，呪いをかけられたぞというので緊張をする．その緊張が高い状態がずっと続くと疲れ果てて，死ぬ場合がある，ということです．

3-3．キャノンのホメオスタシス概念

この現象を人類学ではなく生理学的に説明するとどういうことになるのでしょうか．キャノンの主張を少し見ておきます．キャノンは，1871年生まれの研究者で，情動とか感情の生理学的研究を行っています．第一次世界大戦に若い時に志願して従軍していたので野戦病院がどういう状態かということをよく知っています．

ここで特に重要なのは，キャノンがホメオスタシスという考え方を提唱したことです．それは「恒常性」と訳されます．一つのシステム，それは生き物でもいいし人間でもいいし社会でもいいですが，そうしたシステムは元の状態になるべく戻ろうとする力を持っているという概念です．ある方向に行かせようとしたら，逆に戻す力をもっているということです．人間で言えば自己回復力をもっているという意味です．悪く言えば惰性ですが，よく言えば自己回復力です．要するに生き物というのは同じ状態を続けようとする仕組みがあるという主張です．

キャノンは，我々の体の中の状態は常に外界からの影響でかく乱されているが，それでも安定を維持するための仕組みが必ず何かあると考えました．

キャノンはストレスがあったとき，例えば呪われたときには，自律神経が緊張して興奮した状態が続くと考えました．それは，生理学では「闘争か逃走か（fight or flight）」と言われています．要するに生き物一般にあてはまることですが，敵が来た時に，自分より強そうだったら逃げないといけないし，自分より弱そうか同じくらいだったら戦わないといけない．その選択ができるように自律神経の働きが無意識的に（自律的に）準備するのです．呼吸が速くなって，心臓が早く動き，血圧が上がって，筋肉の方に血液が行って消化管の働きは止まって，血糖値が上がります．アドレナリンが出てきます．

これは，怒りや恐怖に伴って起きる現象と同じ状態です．危険な天敵が来たときに逃げるにしても戦うにしても心臓が早く動いて血圧が上がったほうがいいわけです．消化管の方に血液を流さず筋肉に流さないと戦えません．そんな話です．呪いを受けたと本人が知った時には，それがストレスとなって，これと同じ現象が起きます．その状態が続いていると心臓が早くなって血圧もぐっと高いままなので，だんだんへたばってくる，それがいのちに関わるという仕組みです．

4．擬鼠主義化される心

4-1．脳を切り取られて興奮状態で死ぬネコの実験

いよいよ「ヴードゥー死するネコ」というタイトルに辿りつきました．キャノンの動物実験がこのことに関わってくるのです．

さっきの「闘争か逃走か」ですが，普通はどちらの場合も死なないわけですね．負けたり，逃げ損ねたりすると，食べられて死ぬことはありえますが，これが死ぬという話に結びついたのが，ネコの実験です．脳を上半分だけ切除したネコの実験です．そうされるとネコは体の調節がうまく出来なくなるので，「見せかけの激怒（sham rage）」が起きる．つまり怒ったのと同じような状態になります．

どうなるかというと，毛を逆立てて汗をバーっと肉球のところにかいて，心拍数が増えて血圧が上がるなどのことが起きます．そういう怒ったような，フゥゥーと唸るときのような感じになる．そして，怒ったようなままで，しばらくすると死んでしまう．脳をとったからそれで直後に死ぬのではなくて，キャノンの解釈によれば，興奮状態が続いたので死んだのだ，ということです．

4-2．呪術の効果は信仰を前提とする

この実験自体では，ネコが宗教を信じたりすることはないと思われますから(笑)，ヴードゥー死からかなり遠いものです．しかしキャノンが動物実験を根拠にしたことで，強いインパクトや信憑性が出ました．

それは 20 世紀初頭の心理学が，動物実験をすることで科学的と考える傾向があったからです．それは「擬鼠主義」と言います．擬人主義と同じで擬鼠主義とは，物事をネズミの場合のようにあらわすという意味です．ケストラーという人が心理学を馬鹿にして言い出した言葉です．

心を科学的にみるためには動物実験をしないといけないと考えて心理学がスタートすると，ネズミの前足でレバーを押させる実験が心理学になっていくのです．それはたいへんおかしい，ネズミを調べれば人間の心がわかるというのは中世の衒学と同じくらい馬鹿馬鹿しいことだと，ケストラーは批判しています．

科学的とは動物実験である，という考え方からすれば，ネコの実験で，ネコが怒って，実は興奮してその結果として死ぬというのは，人間のヴードゥー死，呪いによる死と同じことかもしれないということになるわけです．

ただこれは人類学から見ると単純すぎる考えです．先ほど紹介したレヴィ＝ストロースは，さっき引用したのと同じ論文の中で，キャノンを引用して，呪いをかけられて死ぬというのは本当にあるらしいと言った上で，まあ生理学だけではないという話をしています．それは，ネズミとかネコとは違うレベルの話で，呪術の効果は結局，信仰があるかどうかが問題だということです．信念というか文化の重要性ということです．

私がある日突然，井上さんに呪術をかけて「死ねぇ死ねぇ」と井上さんの人形に釘を刺したからといって，死ぬ率はわりと低いと思われます．どうしてかというと，たぶん井上さんがその呪いを信じてないからです(笑)．この信念の問題は自律神経やホメオスタシスとは，直接には関係しません．

4-3．ヴードゥーというイメージ

ヴードゥー死の問題が，1940 年代にこんなに議論されたのはいったい何なんでしょうということ自体が実は一つの大きなクエスチョンになるのです．

一つは，最初に指摘しましたが，世界戦争によって，今までは無かったストレスが生まれたと言うことがあります．もう一つのポイントは，キャノンが挙げている例というのが

南アメリカのトゥピナンバ族で，今はもう絶滅というかほとんどいなくなった人たちなのですが，西欧の先進国ではない特殊な現象として発見されている点です．他に呪いでヴードゥー死する文化があるのは，ブラジルの原住民とかニジェール川下流の原住民とかコンゴとかニュージーランドのマオリ族とか北クィーンズランドとかアボリジニーとか，あとハイチとかギアナとかです．こういう人たちは欧米ではないという点で共通しています．

ヴードゥー教自体は，1930 年代当時では，アフリカ起源ではあるが，西インド諸島のものだとされていました．西インド諸島や合衆国南部に連れてこられた元奴隷の人たちの間で広まっている宗教であるとされていた．ヴードゥーというのがエキゾチックな流行として当時，怖いもの見たさでもてはやされているのです．冒険小説なんかに出てきて，みんな「おお！」とか驚きながら読んでいるわけです．

アメリカの大衆的な読み物の中では，アフリカ大陸からきた人たちがもともと持っていた呪術，という設定です．実際には 18 世紀半ばに入ってから始まった宗教で，西インド諸島で生まれた宗教ですから，キリスト教由来と言えます．つまり，アフリカの伝統宗教というよりは，キリスト教の分派なのです．

5．「異常」な突然死とヴードゥー死

5-1．ショックの意味の変化

ヴードゥー死を引き起こす原因は何かと考えていくと，一つはショック死と結びついています．

ショックについては，キャノンのヴードゥー死に触れた論文にも最後のところで出てきます．論文の最初のほうではキャノンは，ヴードゥー死はアフリカかどこかの伝統文化にあるものだと言っています．でも，論文の最後のところで先進国でも同じような例が起きることがあるとも言っています．それが第一次世界大戦のシェルショックです．これは大砲の砲弾が直接当たらなくても，砲弾が周りに炸裂したときにショックを受けて身体的・精神的な不調が起きるという状態です．戦争に大砲が大々的に導入されてから，こうした精神的ショックで兵役が続けられなくなる兵士が続出して，病気なのか徴兵拒否の仮病なのかと大論争になりました．

同時に，ショックという言葉自体の意味の変化として，もともとは，敵と遭遇したくらいの意味だったものが，17，8 世紀から，一斉射撃を指すようになります．ですから，一斉射撃によって神経がショックを受けた，という趣旨ですね．この点で大砲の砲弾による精神的ショックであるシェルショックと結びつきます．また，19 世紀ではショックという言葉は，鉄道事故とも結びついていました．当時は，鉄道事故の後遺症を「鉄道脊椎症」と呼んでいましたが，これは今で言う「むちうち症」のことです．

そこでは，脊髄に与えられた何らかのショックによって人は極端な場合には死んだりしてしまうこともあるという話も語られています．ということは，このショック死とヴードゥー死をつなげて一つのものと考えれば，キャノンのヴードゥー死とは，ハイチとか黒人とかアフリカだけではなく，戦争のときにショックで死ぬ，あるいは病気が長引くことを指しているのです．

この鉄道事故でのショック死はやはり，大砲などを使った総力戦と同様に近代の発明です．この事故という視点は，非常に重要です．というのは事故によってたくさんの人が苦しむということは，実は近代まではありえないことでした．人間がつくったものによって大災害が起こるなどということは，人間がつくったものがとても巨大になっていない限りありえないのです．19 世紀に最初の鉄道事故がおきて，それがメディアで大きく取り上げ

られました．当時の新聞でも大きな記事になっています．ですから技術の発明というのは事故の発明であると言われるぐらいに，技術と事故というのは密接に絡みあうのです．

ショック死にせよヴードゥー死にせよ，突然にあるいは異常なかたちで人が死ぬというのは何らかの形でその原因について説明しなければならないと社会的には思われています．異常事態を放置することは社会的な不安を引き起こすので，それを文化の中に統合するための仕掛けが必要なのです．死というのは異常事態であるので，それは何かの形で説明をして社会の中にもう一度組み込まないと社会がうまく成り立っていかないのです．

5-2．ショック死の転移として語られたヴードゥー死

人々がショックを受けたままであると，喪を通じて悲しみを乗り越えることがうまく出来ない，ということかもしれません．そう考えてみると，異常な死，突然死というのを説明する原因として，伝統社会のときにはヴードゥー死という呪いで説明され，先進国の国内ではショック死として説明されるといってもいいでしょう．そして，ショック死は近代的な軍隊の持っている大砲とか一斉射撃とか言うものと結びついて出てきたものです．あるいは近代の産業の基礎になった鉄道による事故によって出てきたものです．

近代的軍隊や鉄道は植民地支配にも重要な役割を果たしました．日本でも中国進出と満州鉄道は深く結びついています．軍隊と鉄道というのは一つのセットとして植民地化そのものなのです．

ここからは私の想像です．欧米の19－20世紀では，近代的な軍隊の強大な兵器である大砲やそれまでとは比べ物にならないスピードのある乗り物としての鉄道が引き起こした不幸や死は，見慣れない異物としてのショック死として，不安を呼び起こしたのではないでしょうか．不思議な死としてヴードゥー死が大衆文化の中で広く取り上げられたのは，そうした背景があって初めて可能となったのだと思うのです．そのときには，軍隊や鉄道は消し去られて，アフリカの未開の原住民の話へとすりかわっています．ヴードゥー死という切り口から近代とストレスを見ていくと，近代化についての別の視点が出てくるような気がします．ご静聴ありがとうございます．（拍手）